東洋史研究 第五卷 第二號 昭和十五年二月發行

鐵勒の一考察

小野川秀美

一

鐵勒は Türk の音譯に當り、[1] 突厥は蒙古語に於ける Türk の複數形 Türküt を寫したのであらう[2]と說かれてゐる。然し單數複數の差異はあれ、鐵勒・突厥共に Türk に由來する名稱たることには變りない。オルホン碑文及びエニセイ碑文に依つてトルコ民族自身の稱呼を檢すると、Türk は突厥でも東突厥を指す名稱にして、西突厥は On Oq と呼ばれ、漠北に於ける鐵勒九部の聯合體九姓鐵勒は Toquz Oγuz に當り、別に Säqiz Oγuz, Alti Oγuz 恐らく八姓鐵勒・六姓鐵勒と名付くべきものも見える。Türk はトルコ民族の總稱としてゞはなく、東突厥の獨占する名稱となり、西突厥並に鐵勒諸部の聯合體はそれ〴〵別個の名稱を持つてゐることが、注意されるのである。西突厥が On Oq と呼ばれるのは、それが十箭に分れてゐたことに由來する。新唐書西突厥傳に

可汗分其國爲十部、部以一人統之、人授一箭、號十設、亦曰十箭

と見え、之は沙鉢羅咥利失可汗の治世、貞觀年間のことにして、十箭は On Oq の漢譯に當る。西突厥を支那史料でまた十姓と云ふのも、十箭に分れたことに基く名稱に外ならない。然らば東西兩突厥の間に Türk, On Oq と云ふ名稱上の確然たる區別が生じたのは、貞觀年間以後と認めて差支へないであらう。Türk と Oγuz との關係に就いては、嘗て Barthold 並に Marquart 兩氏に依つて論及されたことがある。Barthold 氏に據れば、「Oγuz は疑もなくトルコ種族にして、Türk と云ふ名稱を採用した嚆矢であり、六世紀に突厥國を建設した。」[3] 或は「Oγuz は六世紀に於て支那から黑海に至る間の凡ての種族を一遊牧國家に統合した偉大な民衆の名稱であつたやうに思はれる。」[4] と說き、また「突厥碑文に於ては Türk なる語は人種的意味よりも寧ろ政治的意味を持つやうに思はれる。」「突厥の可汗及びその從者達は恐らく起原的には Oγuz の民に屬してゐた」[5] と述べてゐる。Oγuz は種族的名稱にして、Türk は Oγuz と云ふトルコ種族に依つて建設された遊牧國家の名稱、卽ち政治的名稱であると云ふ見解である。Marquart 氏も「金山以西の地に於ける Oγuz もまた勿論五世紀に於ける民族大移動に依つて西方に押しやられたのであつて、此の地で蠕蠕の支配下に立つた。蠕蠕國の崩壞後木杆可汗の新興國家の領有に歸し、Türk と云ふ政治的名稱に關與するに至つた」[6] と說いて、Türk を政治的名稱と解してゐる。かゝる Türk と Oγuz との關係に對する Barthold, Marquart 兩氏の見解は、西突厥が Oγuz に依つて構成され、東突厥も Oγuz のある二種族から成立すると云ふ考へから導かれてゐると思ふ。Marquart 氏は「十姓或は十箭、所謂西突厥もまた Oγuz なる名稱に關係がある。然し本來の突厥卽ち骨咄祿可汗の新突厥國は之と異り、單に Tölös, Tardušの兩種族のみから成立つてゐる。西突厥の支配者突騎施可汗の印璽官は Oγuz 民族の賢明な印璽官と云ふ稱號を帶びてゐる。西突厥可汗は十姓可汗の稱號を帶びてゐる。思ふに十姓は

九姓が、通常 Toquz Oγuz と呼ばれる如く、On Oγuz と云はれたであらう。然らば Rašīd eddin 及び Abūl Ghāzi に於ける On Ujγur と Toquz Ujγur と云ふ回鶻の二類別の傳承も結局説明し得られることゝなる⑦」と述べ、Barthold 氏もまた「西突厥の十姓が據つて以て成立してゐた Oγuz 種族は、東トルケスタンに於ける Toquz Oγuz 國及び Sir-Darya の Ghuz 國の基をなした⑧。」「新王朝に於ては全 Oγuz ではなくして、單にその下の二種族 Tölis と Tarduš が聯結した⑨。」と云ふ。兩氏が西突厥を以て Oγuz に依つて構成されたと解する唯一の史料は、闕特勤の葬儀に突騎施可汗の派遣した印璽官が帶びる名稱である。闕特勤碑文（IN 13）に

On Oq oγlim türgäs qaγanda maqarač tamγačï oγuz bilgä Tamγačï kältï.
十 箭 我が子 突騎施 可汗カラ Maqarač 印璽官 Oγuz Bilgä 印璽官が 來タ。

の一句があり、Radloff 氏は

Von meinem geliebten Sohne, dem Türgäsch-Chan, kam Makratsch, der Siegelbewahrer, er, der weise Siegelbewahrer der Ogus.

と譯してゐる⑩。Barthold, Marquart 兩氏はこの譯文に從ひ、der "weise Siegelbewahrer" des ganzen Volkes der Ogus 或は der weise Siegelbewahrer des Volkes der Oguz と解して Oγuz を西突厥に關係付けようとせられたのである。然しながら Thomsen 氏の改譯には

Von den zehn Pfeilen und meinem Sohn (Schwiegersohn? oder: Von meinen Söhnen, den Zehn Pfeilen, und) dem Türgiškagan kam der Siegelbewahrer Maqarač und der Siegelbewahrer Oγuz Bilgä.

と見え⑪、Oγuz Bilgä と固有名詞に解してゐる。若し Thomsen 氏の改譯にして從ふべくんば、Oγuz と西突厥

との關係に對する Barthold, Marquart 兩氏の見解は、當然認め難くなつて來る。Marquart 氏の推測にも拘はらず、既存の史料では西突厥を On Oγuz と稱した例は絶えてなく、必ず On Oq と呼ばれてゐる。恰も九姓鐵勒が必ず Toquz Oγuz と云はれ、Toquz Oq と稱する例が絶えてないのと同樣である。のみならず闕特勤、毗伽可汗、暾欲谷三碑文に於ける Oγuz は通常 Toquz Oγuz の謂であることに注意するならば、この oγuz bilgä tamγačı は Thomen 氏に從ひ Oγuz Bilgä 印璽官と一個の固有名詞に解するを妥當と思ふ。前掲の闕特勤碑文の一句に續いて

qyrqyz qaγanda tarduš ynanču čür kälti.

とあり、Radloff, Thomsen 兩氏共に改定版に於ては「Tarduš Ynanču Čür」と一個の固有名詞に解して、「Tarduš の Ynanču Čür」とした舊譯を改めてゐる。勿論改譯に從ふべきで、この Tarduš は再興の東突厥を構成する「Töllis と Tarduš の民」の Tarduš とは異るとすべきである。oγuz bilgä tamγačı の Oγuz も之と同じく、Toquz Oγuz の Oγuz とは同一視さるべきでなく、從つて之を以て西突厥が Oγuz に依つて構成されたとする唯一の史料とは認め得ないと思ふ。且つ bilgä を人名として用ひた例は突騎施の黑姓に伊里底蜜施骨咄祿毗伽 Iltämiš Qutlug Bilgä あり（新唐書突厥傳）、葛邏祿に裴護頓毗伽あるのにも（新唐書回鶻傳）徵し得られる所である。また再興の東突厥を構成する「Töllis と Tarduš の民」の Töllis, Tarduš は部族名ではなくして、行政區劃名と解すべきである。毗伽可汗碑文（IIE 1?）、

tölis tarduš buduniγ anda itmiš, jabγuγ šadγγ anda birmiš.
Töllis Tarduš ノ民ヲ ソコデ 蹂ヘタ 葉護ヲ 設ヲ ソコデ 與ヘタ。

と見える。之は舊唐書突厥傳に骨咄祿が自立して可汗となり、「以其弟默啜爲設、咄悉匐爲葉護」とあるに當り、默啜を Tardušŝad に、咄悉匐を Tölis Jabγu に任じたと解される。默啜が汗位に卽いて後、默矩卽ち毗伽可汗が Tardušŝad を繼いだ。闕特勤碑文（IE 17）に

äčim qayan olurtuqda özim tardušbudun özä šad ärtim.

我が叔父可汗が卽位シタ時ニ余自身 Tardušの民ノ上ニ設デアッタ。

とあり、舊唐書突厥傳には「默啜立其弟咄悉匐爲左廂察、骨咄祿子默矩爲右廂察、各主兵馬二萬餘人」と見える。咄悉匐が Tölis Jabγu の地位に留ることに變りなく、Tölis Jabγu, Tardušŝad は左廂察・右廂察と記されてゐる。また毗伽可汗の後伊然を經て登利可汗の治世に、その從叔父二人兵馬を分掌して、東に在る者は左殺と號し西に在る者は右殺と號し、精鋭皆分れて兩殺の下にあつた（舊唐書突厥傳）と云ふ左殺・右殺も、恐らく左廂察・右廂察に同じく、Tölis Jabγu, Tardušŝad に當るに相違ない。從つて Tölis Jabγu, Tardušŝad の制は東突厥の復興期を通じて存在したと認めらるべく、回鶻建國と共に二子に葉護・設を與へて、Tardušŝ, Tölis の民を分統せしめたのも、突厥の舊制を踏襲したと解せられる。今 Tölis, Tardušŝ に對する諸家の見解を跡付けるならば、Thomsen 氏は突厥碑文の譯註に於て Tölis を鐵勒に擬し、[12] Hirth 氏は Tardušŝ を延陀に當て、且つ暾欲谷碑文（TIW 3）に türk sir budun jerintä bod qalmadi とある sir を薛に當てゝ、薛延陀は Sir-Tardušŝ であらうと云ふ假說を提出した。[13] Marquart 氏は舊唐書突厥傳の咄悉匐・默矩を左廂察・右廂察に爲したと云ふ記事をば、咄悉匐に東部の統治を、默矩に西部の統治を委ねたと見、Šad der Tardušŝ, der westlichen Hälfte des Türkenreiches と解してゐる。[14] Thomsen 氏は突厥碑文譯註の改定版に於て、名辭表では Tardušŝ に對して「東

突厥を圍む兩部族、或は寧ろ行政區劃の一、而もより重要な一」と記し、Tölis に對して「東突厥を圍む二大部族、或は寧ろ行政區劃の一」と記し、緒言では Töis を國の東部、Tardušを西部と說いて、寧ろ Marquart 氏に從ひ Tölis, Tardušを行政區劃名とする見解に傾いてゐるやうである。Tölis を鐵勒に擬し難いことは既に說かれてゐるけれども、Tardušもまた延陀に當て得ないと思ふ。薛延陀は貞觀二十年(六四六)破滅したが、その餘衆の消息はなほ史籍に散見してゐる。貞觀二十二年(六四八)八月執失思力は薛延陀の餘部を金山に伐ち、九月阿史那社尒はその餘部處月・處密と戰うて之を破り(新唐書二、太宗紀)、また總章二年(六六九)十二月延陀部落の餘衆擾亂、詔して突厥を發し烏羅德健山に至つて大いに之を破り(唐會要九六、薛延陀項)、永隆中(六八〇)曹懷舜は阿史那伏念・溫傳を討つて黑沙に至り虜を見ず、薛延陀の餘部を降して引還し(新唐書、突厥傳)、開耀元年(六八一)薛延陀達渾等五州四萬餘帳が來降したこともある(資治通鑑)。從つて薛延陀の餘衆はその破滅後と雖も餘喘を保つてゐたことは確かであつて、阿史那伏念敗れて後亡散を嘯じて總材山を保し、黑沙城に治した骨咄祿の配下に、その餘衆が混在したかも知れないとは想像される所である。然しながらよし混在したにしても設šad を置かれる程に部族として强大であつたとは到底認め難く、開元三年(七一五)十月投降した首領延陀薛渾達都督に授官賜與したことが見える以外に(冊府元龜九七四、外臣部褒異篇)、突厥の復興期を通じて薛延陀に關する記載はなく、その餘衆も漸く萎微して影を沒するのである。回鶻葛勒可汗(磨延啜)碑文(0.7)に

iki oγlima jabγu šad at birtim, tardušトölis budunqa birtim.

二人ノ余ノ子ニ葉護設ノ名稱ヲ與ヘタ。Tardušトölis ノ民ニ與ヘタ。

と見え、磨延啜はその二子に葉護・設を與へて Tardušトölis の民を分統せしめてゐる。之は突厥の舊制を繼

承したに違ひないが、こゝに所見の Tarduš を延陀に比定し難いことは言を要しない所である。 Tölis Jabγu, Tarduš Šad が左廂察・右廂察に比定され、また左殺・右殺に當ると想定されるのに徴すれば、Tölis, Tarduš は恐らく部族名ではなくして、西突厥に於ける咄陸・弩失畢の如き區劃名と解すべきであらうと思ふ。若し Tölis, Tarduš が部族名にして、Tarduš が延陀に當るとするならば、突厥の復興期並に回鶻の隆盛期に於て、鐵勒の一部族薛延陀はその重要な構成要素をなしてゐる譯であるけれども、かゝる見解は到底成立し得ないのである。なほ Radloff 氏は türk sir budun を兩個の民族名と解して、"das Türk-und das Sir-Volk" と譯し[15]、Hirth 氏は之に據つて sir を薛に當てたのであるが、Thomsen, Le Coq 兩氏は別の解釋を施してゐる。Thomsen 氏は türk sir budun bod qalmadi[16] をば

In dem (alten*) Lande des vereinigten(?) türken Volkes war keinerlei geordnete Gemeinschaft zurückgeblieben.

と譯し、Le Coq 氏は türk sir budun を das machtlose Volk と解してゐる。[17] vereinigten türkischen と machtlose とでは意味は可成り違ふけれども、sir を固有名詞と見ない點に於て共に Radloff 氏と異るのである。元來 Sir-Tarduš は Hirth 氏に依つて案出された言葉であつて、突厥碑文には絶えて現はれて來ない。而して Tarduš が Tölis と共に區劃名であるとする見解が妥當ならば、Sir-Tarduš＝薛延陀と云ふ假說は自ら成立し難く、sir もまた Thomsen, Le Coq 兩氏の如く形容詞または接尾辭と解して毫も差支へないことゝなる。türk sir budun の字句はなほ暾欲谷碑文に於て T2 N60, 61, 62 にも見えるが、兩氏の解釋の何れに從ふべきか、machtlose では意味が通じ難いと云ふ以外に、確言し得ないのは遺憾である。要するに Tölis, Tarduš は部

族名ではなくして區劃名と解さるべく、東突厥の復興期を通じて Töles Jabγu はその領域の東部を、Tardus Sad は西部を分統する制度となつてをり、再興の東突厥が Oγuz の二種族 Töles, Tardus に依つて構成されたとは、自ら認め難い所である。

元來 Oγuz は鐵勒に屬する部族名と認められる。新唐書回鶻傳に回鶻の先蹤袁紇の稱呼を記して「袁紇者亦曰烏護、曰烏紇、至隋曰韋紇と見える。袁紇・烏護・烏紇が、Oγuz の對音にして、韋紇が Uiγur に當るとは、[18] 既に諸名家に依つて考定されてゐる。北史高車傳に高車の族に袁紇氏あるを傳へ、北魏登國五年(三九〇)春正月太祖道武帝は西征鹿渾海に次し、高車の袁紇部を襲つて大いに之を破つてゐる(魏書二太祖紀)。また天興六年(四〇三)冬十月將軍伊謂は二萬騎を帥ゐて北の方高車の餘種袁紇・烏頻を襲うて之を破り(魏書二太祖紀一〇三高車傳)、太和二十二年(四九八)八月高車の衆南行を願はず、袁紇樹者を推して主となし、相率ゐて北叛遊踐したとある(魏書七高祖紀下同書高車傳)袁紇は高車卽ち鐵勒の有力な部族と認むべく、Oγuz は袁紇の對音に當ると云ふのであるから、既に北魏代から Oγuz は漠北にゐたと解しなければならぬ。隋書鐵勒傳には伊吾以西焉耆の西北白山に傍うて居る鐵勒諸部の中に烏護を擧げてをり、また白山に傍うて Oγuz がゐたことを傳へるのである。また隋代には九姓鐵勒 Toquz Oγuz を構成する廻紇・僕骨・同羅・拔也古・斯結・渾・契苾の如き諸部名も始めて史上に現はれて來る。九姓と云ふ名稱は舊唐書六七李勣傳に

「李勣」與李靖謀曰、頡利雖敗其衆猶盛、若走度磧北保於九姓、道阻且遠、追之難及。

とあるを初見とするが、唐代は勿論既に隋代に於ても九姓を構成する諸部は他の鐵勒諸部と共に活潑な動きを見せてゐる。新唐書回鶻傳に磧北に散處する鐵勒十有五種を擧げ、貞觀二十一年(六四七)正月鐵勒廻紇等十三部が

內附して（唐會要七三安北都護府）六府七州を置かれ、同年阿史那社爾は郭孝恪・楊弘禮と共に鐵勒十三部の兵十餘萬騎を率ゐて龜茲を伐つた（冊府元龜九七三外臣部助國討伐）。是等磧北に散處する十有五種・十三部の中に九姓諸部は勿論含まれてゐるけれども、九姓鐵勒 Toquz Oγuz と云ふ聯合體を形成してゐる點に他の諸部とは異る特異性がある。恐らく「袁紇者亦曰烏護、曰烏紇、至隋曰韋紇」の記載は、韋紇が、そのまゝ袁紇に合致すると云ふのではなくして、韋紇は袁紇に由來してゐると云ふ意味であらうと思ふ。袁紇部に就いては魏書以外に記錄を缺き、以後の消息を判明し難いけれども、隋代に至つてもと袁紇部に屬した九姓諸部が擡頭し、記錄に徵すれば唐初には既に九姓鐵勒と云ふ聯合體を形成してゐたと思ふ。なほ回鶻葛勒可汗碑文には Säkiz Oγuz, Enisei 河源 Barlyk 河畔の碑文には Alti Oγuz の名稱が見える。[19] Säkiz Oγuz, Alti Oγuz は共に參照さるべき記錄を缺き、その沿革を辿ること不可能であるけれども、Toquz Oγuz に同じくもとは袁紇部に由來すると推定され、それ〴〵八姓鐵勒・六姓鐵勒と名付くべきものであらう。要するに Oγuz は袁紇・烏護・烏紇の對音にして鐵勒の一部族に由來する名稱にして、唐代には Toquz Oγuz, Säkiz Oγuz, Alti Oγuz の如き聯合體を形成してゐたのである。

以上の如く見ることが誤りないならば、Oγuz を以て Türk と云ふ名稱を採用した最初のトルコ種族であり、東西兩突厥の構成要素を爲したとする見解は、自ら成立し難い所と思ふ。且つ Türk は突厥の建國に依つて始めて唱へられた名稱ではない。鐵勒が Türk の音譯に當るとは、羽田博士の提唱以來定說化されてをり、Türk は突厥の建國以前に於て既に種族的名稱として存在したのである。たゞ東西兩突厥及び九姓鐵勒をば Türk, On Oq 及び Toquz Oγuz と呼び、Türk が東突厥の獨占する名稱となつて以來、Barthold, Marquart 兩氏の見解の如く、多分に政治的色彩を帶びた名稱になつたと解せられる。然しながらトルコ人と云ふ意識は Türk, On

Oq 及び Toquz Oγuz を構成する諸部族を通じて共通に潜在してゐたに違ひない。九姓回鶻愛登里囉泊沒密施合毗伽可汗聖文神武碑卽ち保義可汗碑文のソグド文に

…… dieser Herrscher, der vom Hirrmel die Herrlichkeit empfangen habende, grosee, türkische Weltenherrscher Ai täγridä qutbolmiš〔alpu bilgä qaγan〕……

と見え、[20] 保義可汗を türkische Weltenherrscher と稱してゐるのも參照されるのである。共に Türk に由來する名稱鐵勒と突厥が突厥の建國以來語義を異にして併用されるのも、兩者を構成する諸部族が、共にトルコ種族であると云ふ意識を前提として始めて理解されると思ふ。

二

鐵勒は北周書以來隋唐の史籍を通じて用ひられる文字であるが、魏晉南北朝時代の史籍では勅勒・敕勒・敕勒又は丁零[21]と記されるのが通例である。是等一聯の文字で寫された種族はその先蹤を兩漢三國魏時代の丁靈・丁零・丁令にまで辿り得べく、恐らくは志田氏[22]の如く丁靈・丁零・丁令を以て Türk の訛音と見てよからうかと思ふ。魏書高車傳に[23]

高車蓋古赤狄之餘種也、初號爲狄歷、北方以爲勅勒、諸夏以爲高車・丁零。

と見える。狄歷は勅勒に同じく Türk の音譯であるが、高車もまたその用例に於て勅勒との間に殆ど廣狹の區別を辯じ難い程に密接な關係があり、恐らく部族名ではなくして、勅勒の別稱と解せられる。例へば、斛律氏、袁紇氏は高車に屬する部名であるが、勅勒斛律洛陽（魏書七四爾朱榮傳）、鐵勒斛律沙門（周書一四賀拔岳傳）、勅勒「袁紇」樹者

（魏書七高祖紀下）の名稱が見え、東西部勑勒・二部敕勒は二部高車とも云はれてゐる。[24] 且つ高車副伏羅部の阿伏至羅は太和年間從弟窮奇と共に車師前部の西北に自立して王となつた。之が諸書に勑勒・勑勒と記さるゝことは、既に松田氏に依つて指摘された所である。[25] 隋書鐵勒傳に據れば、獨樂河の北に僕骨・同羅・韋紇・拔也古と共に覆羅がゐた。この覆羅部は副伏羅部の後身であらうと思ふ。魏書卷九肅宗紀に、「正光二年（五二一）八月己巳、伏羅國遣使朝貢」、「正光三年（五二二）夏四月庚辰、以高車國主覆羅伊匐爲鎭西將軍西海郡開國公高車王」とあり、北史卷四魏本紀肅宗紀では伏羅國は伏羅高車となつてゐる。副伏羅部の阿伏至羅が車師前部の西北に建てた遊牧國家は、高車國と云ふ以外に、阿伏至羅國・阿至羅國と呼ばれ、また伏羅國とも云つたのである。伏羅とは、阿至羅の阿伏至羅に於けるが如く、副伏羅の略稱に外ならず、部名または人名を國名として用ひたことを示す。覆羅伊匐もまた副伏羅伊匐の略稱にして、文字に伏と覆の異同あるに過ぎない。之に依つて推すならば、覆羅部は副伏羅部の略稱と見るべく、阿伏至羅國の滅亡後、副伏羅部は鐵勒の一部族として餘喘を保ち、隋書鐵勒傳に覆羅の名稱を以て記されるに至つたと思ふ。かゝる用例に徵するならば、高車は鐵勒の別稱と見らるべく、高車の活動をそのまゝ鐵勒の活動と解して差支へないのである。

隋書鐵勒傳に據れば、鐵勒は東はバイカル湖の南方より西は康國の北アラル海カスピ海方面にまで及ぶ廣汎な地域に亙つて所在に分布してをり、「雖姓氏各別、總謂爲鐵勒」と見える。かゝる廣汎な地域に亙る鐵勒の分布は隋代に卒然として現はれたのではなかるべく、魏晉南北朝の混亂時代を通じて徐々に培はれた事象であらうと思ふ。既に三國魏代には匈奴の北に居る丁令、康居の北に居る丁令及び貲虜に屬する丁令と云ふ風に、丁令は分散してゐたが（魏略輯本下西戎傳）、高車の活動は鐵勒の分布の上に重要な意義を持つてゐなかつたであらうか。魏書一〇

二嚈噠國の條に「嚈噠國大月氏之種類也、亦曰高車之別種、其原出於塞北」とあり、同じく乾陀國の條に「其王本是勅勒」と見え、かゝる所傳もこの推測を可能ならしめるのである。何れにしても鐵勒は廣汎な地域に亙つて分布してゐた。若し憶測にして許されるならば、阿史那氏もまた起原的には鐵勒に屬し、その率ゐる鐵勒の部衆を以て突厥 Türk と云ふ遊牧國家を建設したのであるかも知れない。たゞ突厥の建國以後鐵勒との間に自ら語義の區別が設けらるべく、隋書鐵勒傳では鐵勒とは突厥を構成してゐない他の數多の同一種族を總轄する名稱として用ひられた觀がある。然しながら東西兩突厥殊に西突厥の發展に伴ひ鐵勒の諸部族にして突厥の名稱の下に包轄されるものもあつたらうし、或は見るべき活動なく、停頓の狀態を續けたものもあつたであらう。既に隋代に於て鐵勒の活動はズンガリア並にオルホン地方に於ける、東西兩突厥の間に介在する諸部族に限られてをり、唐代に至つてはオルホン地方の諸部族が活潑な動きを見せ、漸く九姓鐵勒のみ活動の舞臺に立つて來てゐる。こゝに於ても自らこの兩地方殊にオルホン地方の鐵勒をば、考察の對象となさゞるを得ない。

隋唐代に活動した鐵勒諸部は前代の諸部族の名稱と全く異り、相互に關聯を求めること殆ど不可能に近い狀態である。恐らく高車・蠕蠕の滅亡及び突厥の興起と云ふが如き漠北に於ける勢力關係の變動に應じて、鐵勒諸部の間にも著しい隆替のあつたことゝ思ふ。元來太和年間高車副伏羅部の阿伏至羅が車師前部の西北に建てた遊牧國家は蠕蠕と嚈噠の壓迫を受け、殊に蠕蠕との戰に屢々敗れて、北魏末には殆ど解體の狀態にあつた。魏書一二孝靜紀に「興和三年(五四一)夏四月戊申、阿至羅國主副伏羅越居子去賀來降、封爲高車王」と見え、以後高車國または阿至羅國等の名稱は史上に現はれないのである。思ふに阿至羅國に屬した諸部族はその解體後鐵勒の名稱で呼ばれてゐる。周書突厥傳に

時（大統十二年五四六）鐵勒將伐茹茹、土門率所部邀擊破之、盡降其衆五萬餘落、恃其彊盛、乃求婚於茹茹。

とある。從つて阿至羅國の解體後と雖も、茹茹（蠕蠕）との戰はなほ繼續してをり、土門はこの鐵勒卽ち阿至羅國の餘衆を破つて、突厥彊盛の端緒を開いたのである。副伏羅部には以後何等の活動をも認め難く、隋書鐵勒傳に覆羅の名稱を以て僅かにその名殘りを止めてゐるに過ぎない。之はまた隋唐代とその前代とに於て鐵勒諸部の間に隆替のあつたことの例證と見ることが出來る。なほ阿伏至羅は從弟窮奇と共に高車の衆十餘萬落を率ゐて西走したと云ふのであるから、夥しい高車の諸部落が車師前部の西北に遷つたに違ひない。隋書鐵勒傳に、伊吾以西焉耆の西北白山に傍うて居り、また金山の西南に居るとして列擧されてゐる鐵勒諸部には、阿伏至羅・窮奇に從ひ西遷した諸部落に由來するものが多からうと思ふ。然しながら副伏羅部は元來高車十二姓の一にして、十二姓が悉く西遷したのではなく、漠北に留り蠕蠕の支配下に殘された部衆も多かつたに違ひない。記錄上では魏書八世宗紀に

正始五年（五〇七）十有二月甲子、蠕蠕高車民他莫孤率部來降。

と見える以外に、殘留した高車の消息を傳ふる所殆どないやうであるけれども、それは蠕蠕に服屬して、目立つた活動をしなかつた爲に外ならぬ。隋書鐵勒傳に獨樂河の北に居るとして列擧された諸部族の中には、此の地域に固着してゐたと確認さるべきものがあり、その先蹤を求むれば蠕蠕の支配下に殘された高車であらうと推定せざるを得ないのである。突厥の木杆可汗に依つて蠕蠕が滅ぼされて以後、蠕蠕に服屬してゐた高車卽ち鐵勒諸部は突厥に從ひ、白山に傍うて居り、また金山の西南に居た諸部族と共に、その東征西討の用に供され、次第に擡頭の勢を得て來たことゝ思ふ。

三

新唐書回鶻傳及び通典北狄傳六鐵勒の條には、唐初漠北に於ける鐵勒諸部の方位が薛延陀を基點として粗略ながら記されてゐる。回鶻は「居薛延陀北娑陵水側、距京師七千里」(回鶻傳上)と見えてセレンガ河上に居り、薛延陀はその南に當るからオルホン河域にゐたに違ひない。貞觀三年(六二九)薛延陀の眞珠毗伽可汗夷男が「牙を鬱督軍山に樹つ、京師に直すること西北六千里」(回鶻傳下)と云ふのも、この河域に比定されるのである。薛延陀の東界に多覽葛が同羅水即ちトラ河に濱して居り、多覽葛の北に斛薛、西北に阿跌、東に僕骨がゐた。僕骨は「與同羅宿敦隣好最居北邊」(通典)と記され、同羅は「在薛延陀北多覽葛之東」(回鶻傳下)とあるから、多覽葛の東でも北方に僕骨、南方に同羅がゐて、宿敦隣好の關係にあつた。同羅は突厥碑文所見の Toyra にして、トラ河の水名に因んだ名稱に相違ない。奚結・思結に就いては「奚結處同羅北、思結在延陀故牙、二部合兵二萬」(回鶻傳下)と見え、「二部合兵二萬」とあるからには隣接してゐたらしく、同羅・僕骨と斛薛の間に介在してゐたと推定出來る。なほ拔野古は僕骨の東境に在つて靺鞨と隣りし、契苾は多覽葛の南に在り、白霫は拔野古の東に在るとも、鮮卑の故地に居り同羅・僕骨と接してゐたとも記されてゐる(通典回鶻傳下)。こゝで注意すべきは回鶻の南に居る薛延陀と同羅の南に在る薛延陀とは異ることである。同羅の南に在る薛延陀とは、舊唐書鐵勒傳に

「貞觀」四年、平突厥頡利之後朔塞空虛、夷男率其部東返故國、建庭於都尉建山下獨邏河之南、在京師北三千三百里。

とある薛延陀に當るべく、鐵勒諸部の方位はオルホン河域及びトラ河の南方に設けられた薛延陀の牙帳を基點として記されてゐることゝなる。是等諸部族の間に於て著しい事象は部族の融合であらうと思ふ。薛延陀は通典北

狄傳六同條に

鐵勒之別部也、與薛部雜居、因號薛延陀。

と見え、新唐書回鶻傳下にも「薛延陀者與薛種雜居、後滅延陀部有之、號薛延陀」とある如く、薛と延陀の兩部より成立してゐる。斛薛に就いては通典北狄傳六同條に

斛薛亦鐵勒之別部、在多濫葛北境、兩姓合居、勝兵七千。

と見える。兩姓合居が多濫葛と斛薛との謂でないことは、同じく通典北狄傳六多濫葛の條にその兵數を示して、「勝兵萬人」とあるに徵しても明白であつて、之は斛と薛の兩姓が合居して斛薛部を形成してゐたと解しなくてはならぬ。思ふに斛薛の薛は薛延陀の薛に當るに相違ない。思結が「延陀故牙」に在り、奚結と共に斛薛と同雜・僕骨の間に介在してゐたであらうこと既に推定した所であつて、延陀・薛・斛の三部は隣居または雜居の狀態にあり、その間に自ら薛延陀・斛薛兩部の結成を見たことゝ考へられる。また通典北狄傳六契苾羽の條には

契苾羽在多濫葛南、兩姓合居、勝兵三千。

とあり、新唐書回鶻傳下にも「契苾亦曰契苾羽」と見えて、契苾と羽の兩姓が合居して契苾羽を形成したと解されるやうである。然るに唐會要七二諸蕃馬印の條には

契馬與阿跌馬相似、在閣洪達井已北獨樂水已南、今榆溪州、印仝。

苾羽馬與廻紇馬相類、在特勒山北、印丘。

契苾馬與磧南突厥相似、在涼州闕氏岑移向特勒山住、印丘。

と記され、契・苾羽及び契苾の名稱を擧げてゐる。榆溪州とは、貞觀二十一年(六四七)鐵勒に六府七州を設けた

時契苾に置かれた州名である。全唐文八平契苾幸靈州詔に

其契苾車必俟斤及鐵勒諸姓廻紇胡祿俟利發（吐迷度）等總百餘萬戸散出北漠、遠遣使人委身內屬、請同編列並爲州。

と見え、契苾車必俟斤に對して楡溪州が置かれたと推定出來る。然るに、契は「今楡溪州」、苾羽は「在特勒山（特勒は都斤に同じく Ütükän の音譯と思ふ）北」と云ふ以上、契苾羽は契と苾羽に分れてゐたと解しなければならぬ。開元三年（七一五）十月己未北蕃投降の鐵勒諸部中に契都督邪沒施の名が見え（冊府元龜九七四外臣部褒異篇）、契部は開元年間には既に存在してゐた譯である。契苾羽が契と苾と羽の三部より成つてゐたか、或は契苾と羽の兩部より成り、後契と苾羽に分れ、契苾は涼州闕氏岑移向特勒山に處る部衆のみが有する名稱となつたかは詳でないにしても、契苾を以て部族融合の一例證と解することに差支へない。また新唐書回鶻傳下には「多覽葛亦多濫」とあり、恐らく多覽葛も多覽と葛の兩部から成つてゐたと考へられる。

是等の例證に徵するならば、漠北に於ける鐵勒諸部に部族融合を著しい特徵と認めることが出來る。而してかゝる事象は葱卒に起るのではなくして、可成りの長期に亙つて相互に共通の脅威と利害を嘗めて始めて現はるべきである。恐らく蠕蠕・高車の爭亂並びに突厥の興起と云ふが如き漠北に於ける勢力關係の甚だしい變動が、鐵勒諸部をして自ら部族融合の機運に向ふものあるに至らしめたと思ふ。先きに隋書鐵勒傳に獨樂河の北に居るとして列擧された諸部族の中には、この地域に固着してゐたと確認されるものがあると述べたのは、一定の地域に比較的長く固着してゐるに非ざれば、かゝる事象は現はれ難いと解したからである。なほ薛延陀・契苾を部族融合の例證として數へたのであるが、兩者に就いて最初に記載の見える隋書鐵勒傳に據れば、薛延陀・契苾はそれ

〳〵金山の西南及び伊吾以西焉耆の西北白山に傍うて居る部族中に擧げられてをり、相互の關係を更に考察する要がある。

舊唐書鐵勒傳に「貞觀」四年平突厥頡利之後、夷男率其部東返故國、建庭於都尉建山下獨邏河之南」と見える。こゝに云ふ「故國」は「延陀故牙」と共に薛延陀の故地がトラ河々域にあつたことを傳へる重要な史料とするに足る。思結は「延陀故牙」に在り、奚結と共に斛薛と同羅・僕骨の間に介在して居り、この地域に於て薛延陀・斛薛の兩部が形成せられたであらうことは既に述べた所である。恐らく隋代に金山の西南にゐた薛延陀は、「延陀故牙」「故國」の存在するトラ河々域から移轉したのではないか。かゝる推定の傍證として隋の開皇末に於ける鐵勒分散の事實を指摘し得ようかと思ふ。隋書鐵勒傳に

開皇末晉王廣北征納民、大破步迦可汗、鐵勒於是分散。

とあり、冊府元龜九五六外臣部種族篇薛延陀の項には

可汗姓壹利咄氏、代爲强族、初茹茹之滅也、並屬於突厥、隋開皇中啓民滅都濫、鐵勒亡敗依于西藩。

と見えてゐる。開皇年間東突厥は都藍(雍虞閭)、步迦(達頭)、啓民(染干)の三可汗が鼎立して相爭ふ狀態にあつた。染干は沙鉢略可汗の子にして、突利可汗と號して北方に居り、開皇十七年(五九七)安義公主に尙せられるの故を以て、南して度斤(Ütükän)の舊鎭に徙つた(隋書突厥傳)。度斤以北の地に可汗を稱してその地域の鐵勒を統べてゐたと推定されるのである。而して染干の尙主は隋が北夷を離間せんとの方策に出てをり、雍虞閭をして朝貢を絕つて屢々邊患をなし、「有隙數相征伐」(隋書突厥傳)の關係にあつた達頭のために、染干を攻擊するに至らしめた。開皇十九年(五九九)染干は隋に歸朝して朔州の大利城に居り、雍虞閭の侵掠止まざるに依り、更に河南に遷つて夏勝

二州の間に據る有樣であつた。楊素・韓僧壽・史萬歲・姚辯をしてそれ〴〵靈州・慶州・燕州・河州に出でゝ都藍可汗（雍虞閭）を伐たしめんとしたのはこの時であるが、隋書突厥傳に

師未出塞而都藍爲其麾下所殺、達頭自立爲步迦可汗、其國大亂。

と記され、突厥內部は師未だ出でずして都藍の被殺、達頭の自立に伴つて國大いに亂れた。かゝる「賊內攜離其主被殺」の狀態に乘じ、染干の部下を遣つて分頭招慰せしめようと云ふ長孫晟の奏請に基いて（隋書五一長孫晟傳）、晉王廣北征納民大いに步迦可汗を破つたのである。達頭は晉王廣に大敗したが、その入寇はなほ續き、弟子俟利發を遣つて磧東より啓民可汗（染干）を攻めしめ（隋書突厥傳）、仁壽元年（六〇一）自ら塞を犯し（隋書五二韓洪傳）、同年楊素は染干を送つて北伐した際、阿勿思力俟斤等の南して啓民の男女六千口雜畜二十餘萬を掠むるに遭ひ、大いに之を破つてゐる（隋書突厥傳）。蓋し達頭の命を受けて啓民の男女雜畜を掠めたのに違ひない。然しながら阿勿思力俟斤の敗北後「自是突厥遠遁磧南無復虜庭」（隋書四八楊素傳）、「賊衆多降」（隋書五一長孫晟傳）の結果となり、仁壽元年五月己丑、突厥男女九萬口が來降したのも（隋書二高祖紀）この敗北に關聯してゐる事項と思はれる。長孫晟は楊素の北伐に受降使者として從ひ、染干に敎へて使者を分遣して北方鐵勒等の部に行き招攜之を取らしめることゝした。仁壽三年（六〇三）鐵勒の思結・伏利具・渾・斛薩・阿跋・僕骨等十餘部が盡く達頭に背いて來り降附を請うたのは、この招攜の結果であつて、隋書五一長孫晟傳に「達頭衆大潰西奔吐谷渾、晟送染干安置于磧口」と見え、達頭は磧南の虜庭を失ふと共に鐵勒十餘部の背叛に遭ひ、吐谷渾に西奔するの餘儀なきに至つて滅びたのである。

開皇末都藍の被殺、達頭の自立に伴ひその國大いに亂れたと云ふ突厥の狀態は、達頭の西奔に依つて益々混亂したこと想像に難くない。鐵勒の分散もかゝる混亂狀態に起因してゐるのである。先きに染干が隋に歸朝して以

來その鐵勒諸部に對する壓力は甚だしく薄れた。隋書突厥傳に

詔楊素爲雲州道行軍元帥率啓民北征、斛薛等諸姓初附于啓民、至是而叛。

とあり、斛薛等の如く仁壽元年楊素・啓民が北征するまではなほ啓民(染干)に附してゐた諸姓もあつたけれども、雍虞閭・達頭に歸屬したものゝ多かつたことは、仁壽三年鐵勒十餘部が盡く達頭に叛いて來り降附を請うてゐるのに徵して明白である。然しながら「步迦奔吐谷渾、啓民遂有其衆」(隋書突厥傳)と云はれ、染干は達頭の西奔後磧口に在つて再び鐵勒十餘部及び達頭の餘衆を領有したと思はれる。大業三年(六〇七)煬帝が榆林に幸し塞外に出で突厥中を經て涿郡に出ようとした時のことを記して、隋書長孫晟傳に

仍恐染干恐懼、先遣晟往喩旨稱述帝意、染干聽之、因召所部諸國奚霫室韋等種落數十酋咸萃。

とあり、染干は奚霫室韋等の種落を根據として、その勢力を漠北に延ばしてゐたと見える。

かく鐵勒諸部は染干及び雍虞閭・達頭の如き東突厥三可汗の勢力の消長に應じて從屬を異にすると云ふ不安定な狀態にあつたが、別に西突厥と交渉を持つ諸部がある。隋書鐵勒傳に

是歲(仁壽元年)泥利可汗及葉護俱被鐵勒所敗、步迦尋亦大亂。

と見える。この泥利可汗及び葉護を破つた鐵勒とは、泥利の後を繼げる處羅可汗に叛いた鐵勒に當るに違ひない。大業元年(六〇五)西突厥處羅可汗が鐵勒諸部を擊つて厚稅其物を歛め、またその魁帥數百人を集めて盡く誅した。是より一時に反叛處羅可汗を拒み、遂に契苾歌楞を推して易勿眞莫賀可汗と爲して貪汚山に居り、薛延陀乙失鉢を立てゝ也咥小可汗と爲し燕末山を保せしめたのである(隋書鐵勒傳・新唐書回鶻傳下)。この反叛には契苾・薛延陀二部のみでなく、回紇・僕骨・同羅・拔野古も加はつてゐる(新唐書回鶻傳下)。恐らく泥利可汗を破つた鐵勒もまた是等の諸

部にして、冊府元龜九五六外臣部種族篇薛延陀の項に「隋開皇中啓民滅都濫、鐵勒亡敗依于西藩」とあり、開皇末の大亂のために亡敗西突厥に依つた諸部が、その可汗との間に軋轢を生じたのであらうと思ふ。然らば鐵勒は開皇末より仁壽に亙る突厥の混亂狀態の下に於て東西兩突厥に從屬することを餘儀なくされた。思結・伏利具・渾・斛薩・阿跌・僕骨等十餘部は染干に、回紇・僕骨・同羅・拔野古は處羅に屬したのである。薛延陀・契苾二部はこの大亂に遭うて亡敗西突厥に依り、ズンガリアに移轉したのではないか。鐵勒諸部がそのまゝ元の居住地にゐて、染干・處羅に分屬したと云ふのみでは「鐵勒於是分散」と云ふ隋書鐵勒傳の一句が遂に解けないと思ふ。蓋し薛延陀・契苾の原住地は部族融合の著しいトラ河々域に比定し得るからである。

四

隋末唐初に於て鐵勒は西突厥處羅可汗に叛いて自立せる契苾・薛延陀及び回紇・僕骨・同羅・拔野古を主體として活動し、遂に薛延陀の漠北統一に依つて、突厥に代り漠北に雄視する一時期を形成してゐる。以下その沿革を辿るならば、大業元年(六〇五)契苾歌楞は易勿眞莫賀可汗となつて高昌の北貪汚山に據り、薛延陀乙失鉢は野咥小可汗となつて燕末山を保し、また回紇は僕骨・同羅・拔野古と共に漠北に俟斤を稱した。契苾歌楞の勢力は相當に强大であつたと見え、隋書鐵勒傳に「伊吾高昌焉耆諸國悉附之」とある。高昌王麴伯雅は宗女華容公主に尙せられ、大業八年(六一二)冬歸蕃、令を國中に下して被髮左衽を改めて庶人以上は宜しく解辨削衽に從ふべきを諭してゐるが、隋書高昌傳にその時のことを記して

然伯雅先臣鐵勒、而鐵勒恆遣重臣在高昌國、有商胡往來者、則稅之送於鐵勒、雖此令取悅中華、然竟畏鐵勒

而不敢改也。

と見える。こゝに云ふ鐵勒とは契苾歌楞を指してゐるに違ひない。歌楞はまた犯塞の償ひとして、大業三年（六〇七）攻めて吐谷渾を破り、その部を攜散せしめたこともある（隋書八三吐谷渾傳同書六一宇文述傳）。かく契苾は短期間ながら強大であつたが、他の鐵勒諸部の狀態は史料を缺き不明である。新唐書回鶻傳下に

突厥射匱可汗復彊、二部黜可汗號往臣之、回紇・拔野古・阿跌・同羅・僕骨・白霫在鬱督軍山者東附始畢可汗、乙失鉢在金山者西役葉護可汗。

とあり、東西兩突厥が再び强盛とおるに及んで、その間に介在する鐵勒諸部は之に分屬し、契苾・薛延陀もまた可汗の號を去るに至つたと見える。射匱可汗は大業七年（六一一）冬處羅可汗を隋に入朝せしめて以後强盛となり、大業十一年（六一五）から武德二年（六一九）の間に歿して、[26] 弟統葉護可汗が繼いでゐるから、契苾歌楞が可汗の號を去つたのは、大業八年以後間のないことゝ推定出來る。舊唐書一〇九契苾何力傳に

父葛、大業中繼爲莫賀咄特勒、以地偪吐谷渾、所居隘狹、又多瘴癘、遂入龜茲居于熱海之上、特勒死何力年九歲、降爲大俟利發。

とあり、新唐書一一〇同傳には「契苾何力鐵勒哥論易勿施莫賀可汗之孫、父葛、隋末爲莫賀咄特勒」と見える。契苾歌楞は可汗の號を去つて莫賀咄特勒と稱し、隋末葛が之を繼ぎ、その死後契苾何力は更に降つて大俟利發となつたのである。之は歌楞が可汗を稱する以前の稱號にかへつた譯で（隋書鐵勒傳）契苾の急激な衰頹を想像出來る。且つ「地吐谷渾に偪り居る所隘狹又瘴癘多し」と云ふのは、契苾が可汗の號を去ると共に貪汗山の地から吐谷渾の近隣に居を徙してゐたことを示す。また「龜滋に入り熱海の上に居る」と云つても、契苾の部衆が悉く徙つた

のではなからうと思ふ。舊唐書契苾何力傳に

貞觀六年(六三二)隨其母率衆千餘家詣沙州奉表內附、太宗置其部落於甘涼。

と見える。之は新唐書黨項傳の「貞觀六年與契苾數十萬內屬」と云ふ記事に參照さるべく、黨項と共に內屬するからには熱海の上にゐた部衆ではなくして、吐谷渾の近傍にゐた契苾と推定され、之が甘涼の間に置かれたのである。甘涼の間に置かれた契苾のために唐では賀蘭州を設けたらしく、[27] 後年則天武后の時廻紇・思結・渾三部と共に漠北から甘涼二州の地に徙つた契苾は(舊唐書鐵勒傳)、賀蘭州に併合された如く思はれる。開元八年(七二〇)十一月辛巳突厥が甘涼等の州に寇して、河西節度使楊敬述を敗り、契苾部落を掠め去つたと云ふのも(資治通鑑)、この地域になほ契苾部落が存在して證左にして、唐會要七二諸蕃馬印の條に「在涼州闕氏岑移向特勒山住」と記される契苾は、この甘涼の間に居る契苾に當るのである。兎に角貪汗山に據つてゐた契苾は可汗の號を去つて以後急速に衰微し、部族としては再び著しい活動をする事がない。他の鐵勒諸部もまた穩かに東西兩突厥に從屬してゐたと見えて、その活動を傳へる殆ど何等の記錄もないのである。西突厥は射匱可汗の後を統葉護可汗が繼ぎ「既立後始開土宇、東至金山、西至海、自玉門已西諸國皆役屬之、遂與北突厥爲敵」と云ふ射匱の狀勢は、統葉護立つて益々確立され、「控弦數十萬霸有西域」「西戎之勢未之有也」の隆盛を誇るに至つた(舊唐書西突厥傳)。略々時を同じくして東突厥もまた大業五年(六〇九)啓民可汗の後を始畢可汗が繼ぎ、隋末の大亂に遭うて中國人之に奔る者多く、「其族强盛北狄之盛未之有也、高視陰山有輕中夏之志」とは舊唐書突厥傳の傳へる所である。始畢可汗は武德二年(六一二)四月歿して處羅可汗が繼ぎ、數ケ月にして歿して頡利可汗の治世となる。始畢・處羅の强盛は頡利に依つて繼承せられ、「頡利始めて嗣立し、父兄の資を承けて兵馬强盛、中國を馮陵するの志あり」と云ふ(舊唐書突厥傳)。

隋朝の倒潰に伴ひ中原が混亂してゐるに乘じて、東西兩突厥は相呼應して未曾有の强盛を致した。兩勢力の間に介在する鐵勒諸部が穩かに之に分屬したのも、自然の趨勢と見るべきである。而して鐵勒諸部に再び活動の機會を與へたのは、貞觀の初年强大な兩勢力の紀綱漸く崩れた際で、金山の西南よりする薛延陀の東遷が漠北の勢力關係を一轉せしめる契機となつてゐる。舊唐書突厥傳に

貞觀元年(六二七)陰山以北薛延陀・廻紇・拔也古等部皆相率背叛、擊走其欲谷設、頡利遣突利討之、師又敗績輕騎奔還、頡利怒拘之十餘日、突利由是怨望內欲背之。

と見える。この背叛には薛延陀・廻紇・拔也古並びに同羅・僕骨等十餘部が加はつてゐたことは、通典北狄傳突厥上の項及び舊唐書六八張公謹傳に依つて知られ[28]、恐らく漠北に於ける鐵勒諸部が悉く叛いたと思はれる。欲谷設は頡利の子にして、拓設阿史那社尒と共に回紇・僕骨・同羅の諸部を分統してをり、鐵勒諸部は先づ欲谷設を破り、次いで拓設をも破つてゐる(兩唐書、阿史那社尒傳)。突利可汗は元來東偏に在つて奚霫契丹靺鞨等數十部を管轄してゐたが、徵稅度なく諸部多く之を怨み、貞觀の初め奚霫等が唐に來降するのことあつて頡利の怒りを買ひ、その償ひとして薛延陀を擊ち敗績したのである(兩唐書突厥傳)。この鐵勒諸部の背叛を理解するには、前提として頡利可汗の施政狀態を考へて見る要がある。舊唐書突厥傳に

頡利每委任諸胡疎遠族類、胡人貪冒性多翻覆、以故法令滋彰兵革歲動、國人患之諸部攜貳、頻年大雪六畜多死、國中大餒、頡利用度不給、復重斂諸部、由是下不堪命、內外多叛之。

とあり、新唐書突厥傳もまた同樣に傳へ、たゞ頡利が華士趙德言を得てその人の材能を認め、之に委任して稍々國政を專らにした一事を附加してゐる。頡利可汗が政を委ねた胡人とは康國人の謂にして[29]、その施政が法令滋彰

兵革歳動の有樣であつたために、用度給せず諸部に重歛する結果となり、內には族類を疎遠にして不平を招き、外には諸部を攜貳せしめるに至つた。加ふるに頻年の大雪大饑の天災があつて、混亂を促す機會が與へられたのである。かゝる突厥內部の政亂は武德九年(六二六)八月唐太宗と頡利可汗が便橋に和盟して(舊唐書二太宗紀上)以後の狀態であるやうに見える。新唐書一〇五張孫無忌傳に「突厥頡利可汗已盟而政亂、諸將請遂討之」とあり、同書八七梁師都傳にも「遂窺渭橋後政亂」と記さる。鐵勒十餘部の背叛にはこの政亂天災が背景となつてゐるに違ひない。背叛の年次に就いては兩唐書突厥傳・通典北狄傳上の項共に貞觀元年のことゝして記し、資治通鑑もまた貞觀元年の最後にこの背叛を傳へてゐる。從つて貞觀元年と見て誤りないやうであるが、なほ調べると、新唐書一一〇阿史那社尒傳は貞觀元年とするのに對して、舊唐書一〇九同傳には「武德九年(六二六)延陀・廻紇等諸部皆叛」とあり、冊府元龜外臣部讐怨篇にも同じ記錄が見えてゐる。之に參照さるべきは冊府元龜外臣部交侵篇に

唐高祖武德末突厥阿史那社爾入侵中國、歸而遇延陀・廻紇等部皆叛破欲谷設。

と云ふ記事である。恐らく阿史那社爾は武德九年頡利可汗の入寇に從つてをり、同年八月乙酉便橋に和盟しての歸途薛延陀・廻紇等の背叛に出會つたのである。欲谷設と共に廻紇・僕骨・同羅を分統してゐた阿史那社爾が南侵して統轄の弛んだのに乘じて、欲谷設を破つたのであつて、鐵勒十餘部の背叛は武德九年八月に近き頃既に起つてゐたと推定出來る。然らばこの背叛の年次は金山の西南にゐた薛延陀の東遷と如何なる關係に立つのであるか。舊唐書鐵勒傳に

貞觀二年(六二八)葉護可汗死、其國大亂、乙失鉢之孫曰夷男、率其部落七萬餘家附于突厥、遇頡利之政衰、夷男率其徒屬反攻頡利大破之。

と見える。新唐書回鶻傳下にも略々同樣の記事を載せてゐるが、「其國大亂」を「其國亂」に、「遇頡利之政衰」を「後突厥衰」に改めてゐる。何れにしても貞觀二年統葉護可汗死して西突厥が亂れたために、東遷して東突厥の頡利可汗に附したとするに變りないのである。資治通鑑は貞觀元年の最後の條に「統葉護勢衰へ、乙失鉢の孫夷男部落七萬餘家を帥ゐて頡利可汗に附す」と述べ、貞觀二年の最後の條に「西突厥統葉護可汗其伯父の殺す所となる」と記して、夷男の東遷と統葉護可汗の死を區別してゐる。夷男の東遷が、貞觀元年或は二年の何れであるかは決定し難いけれども、二年十一月には鐵勒諸部は夷男を可汗に推戴しようとする迄になつた（唐會要九四北突厥項）。

新唐書突厥傳上に

頡利之立、用次弟爲延陀設主延陀部、步利設主靈部、統特勒主胡部、斛特勒主斛薛部、以突利可汗主契丹靺鞨部、樹牙南直幽州、東方之衆皆屬焉。

と見える。之は頡利可汗の立つた武德二年（六一九）以後の狀態にして、頡利が次弟を以て延陀設と爲し延陀部を主らしめたと云ふ以上、少くとも武德年間既に東突厥に屬した薛延陀があつたことを認めなければならぬ。恐らく薛延陀には隋の開皇末の大亂に際して金山の西南に遷徙したものと、トラ河々域に殘留したものとがあつて、頡利可汗が延陀設をして統べしめた薛延陀はこの殘留した部衆に當るべく、之が武德九年廻紇・拔野古等と共に叛いたのであらうと思ふ。夷男は部落七萬餘家を率ゐて貞觀元年或は二年に東突厥に來り、既に叛ける諸部に合流してその主腦となるに至つたのである。而も頡利可汗は唐が突厥の弊に乘ぜんことを恐れ、兵を引いて朔州に入りその攻擊に備へる有樣であつた（舊唐書突厥傳）。鐵勒の背叛を等閑に附することはないにしても、主力を南方に注がざるを得なかつたことは、內部の不和、天災の好條件と相俟つて、反亂を急速に擴大化せしめたに違ひない。既

に貞觀二年十一月鐵勒諸部は夷男を可汗に推戴しようとしたが敢へて當らず、三年當に頡利を圖らんとする唐太宗の冊立があつて、始めて眞珠毗伽可汗と稱し、牙を鬱督軍山に建てた。翌年東突厥の滅亡後夷男は東して故國にかへり、庭を都尉犍山下獨邏河の南に建て、庶長子曳莽をして東方を、嫡子拔酌をして西方を統べしめて、南北部と號した。唐會要九六薛延陀の項に據れば、曳莽は雜種を統べ、拔酌は延陀の部衆を統べたと云ふ。而して曳莽・拔酌は貞觀十二年(六三八)九月それ〴〵突利失可汗・肆葉護可汗に冊立されてゐる。蓋し唐太宗は薛延陀の太盛なるを恐れ、外優崇を示して實はその勢を分たんと欲し、小可汗に冊立したのである(唐會要九六、薛延陀項)。此の間に於て鐵勒諸部の酋長は俟斤または俟利發を稱し、廻紇の菩薩のみは活頡利發を號して薛延陀に歸屬してゐた如く思はれる。

薛延陀・廻紇・拔野古等鐵勒十餘部の頡利可汗に對する背叛、その結果として現はれた薛延陀の建國に依つて漠北の狀勢は一轉した。突厥は唐と鐵勒との挾擊に遭うて潰え、餘衆或は薛延陀に走り西域に入り、而も唐に來降する者なほ十餘萬あつたと云はれ(新唐書突厥傳)、漠北が鐵勒のみの活動の據地となるに至つたのは、この背叛に依り導かれたのである。よし薛延陀の隆盛は眞珠毗伽可汗一代の間にして、貞觀十九年(六四五)可汗の死後內紛あり、鐵勒諸部の離叛と唐の討擊に遭うて滅亡したとはいへ、突厥の餘衆は漠南に在つて唐の羈縻下に餘喘を保ち漠北が鐵勒諸部の據地たることには、突厥の復興期に至るまで變りない所である。貞觀二十年薛延陀の滅亡後唐は翌二十一年鐵勒諸部に六府七州を設け、故單于台に燕然都護府を置いて之を統べしめ、また磧南鞠鵜泉以北に過郵六十八所を置き、その勢力を遠く漠北に振張せしめた。唐の勢力下にあつて鐵勒諸部は延陀の餘衆を討ち、阿史那社鼻を破り、或は高句麗征伐に加はり、阿史那賀魯征討に從ふと云ふ風に、その東征西討の用に供された

のであるが、漸くその羈絆を脱しようとする傾向も起つて來た。顯慶五年(六六〇)より龍朔三年(六六三)に亙る鐵勒九姓の叛亂はその現はれであらうと思ふ。顯慶五年八月鄭仁泰は悉結・拔也古・僕骨・同羅と戰うて之を敗り、龍朔元年十月鄭仁泰・薛嗣業・阿史那忠は鐵勒を伐ち、二年三月鄭仁泰鐵勒と天山に戰うて之を敗り(新唐書三高宗紀)、三年春正月鄭仁泰等師を帥ゐて鐵勒の餘種を討ち盡く之を平げてゐる(舊唐書四高宗紀)。龍朔三年燕然都護府を瀚海都護府と改めて漠北に徙したのは、この叛亂鎭定後に於て鐵勒に對する唐の勢力を强化せんためであつた。瀚海都護府は總章二年(六六九)安北都護府と改稱され、垂拱元年(六八五)同羅・僕骨等諸部の叛亂があり、遂に同城に僑置されることゝなる(資治通鑑)。都護府の同城僑置は鐵勒に對する唐の勢力が甚だしく薄れたことの證左に違ひないのであるが、この頃既に漠南に於て突厥の復興がその緒に就いてゐる。唐の勢力下に於ける鐵勒の沿革は故岩佐學士の論稿「突厥の復興に就いて」に精しく考證されてあり、簡單な叙述に止めて、次に突厥の復興期に於ける鐵勒の狀態を考察の對象とする。

五

薛延陀の滅亡以後突厥の復興期を通じて、鐵勒は九姓鐵勒を主體として活動してゐる。既知の如く、唐會要九八廻紇の項には九姓として廻紇・僕固・渾・拔曳固・同羅・思結・契苾・阿布思・骨崙屋骨を擧げ、後の二姓は恐らく天寶後始めて七姓と齊列したと云ふ。天寶以前に於て阿布思・骨崙屋骨に代るべき名稱が何であるかは、明確な史料の出ない限り決定し難い。唐會要七三靈州都督府の條に

開元元年(七一三)復以九姓部落置皋蘭・燕然・燕山・雞田・奚鹿・燭龍等六州並屬靈州。

とあり、舊唐書三八地理志では皐蘭を東皐蘭に、奚鹿を雞鹿に作つてゐる。皐蘭・燕然・雞田・雞鹿は貞觀二十一年鐵勒諸部に六府七州を設けた際の州府名であつて、それ〴〵渾・多覽葛・阿跌・奚結に置かれたのである。燭龍州は貞觀二十二年三月瀚海都督俱羅勃部に置かれ(資治通鑑)、東皐蘭州は渾部を以て置かれた(新唐書四三)。たゞ燕山のみは不明である。從つて州名から推すならば、開元元年六州を設けた九姓部落とは、俱羅勃は回鶻の一姓堀羅勿に當るから除外するにしても、多覽葛・阿跌・奚結を含ませることが出來る。之が唐會要九八廻紇の項所見の九姓と如何なる關係に立つか、參照すべき記錄を缺き、その消息を明かにし難い。然しながら唐初には九姓は既に成立してをり、薛延陀の滅亡以後突厥の復興期を通じて鐵勒が九姓と云ふ一個の聯合體を主體とし、他の鐵勒諸部は之に附隨的に活動するに止ることは、當時の史籍を繙く者の了解し得る所と思ふ。鐵勒と云ふ名稱が漸く九姓鐵勒の略稱の觀を呈し來るのも、鐵勒の主體が九姓にあつた故に外ならぬ。突厥碑文に於て Tequz Oγuz の活動のみ獨り顯著であるのも、之と規を一にする事項である。

突厥復興の祖骨咄祿可汗 Ilteris Oγan は調露永隆中(六七九—六八〇)に於ける單于府の大酋溫傳・奉職二部の叛を承けて永淳元年(六八二)立ち、亡散を嘯して總材山を保し、また黑沙城に治して衆五千を有した。舊唐書突厥傳に「又抄掠九姓得羊馬甚多、漸至强盛、乃自立爲可汗、以其弟默啜爲設、咄悉匐爲葉護」とあり、九姓を抄掠して漸く强盛になつたと傳へらる。暾欲谷碑文に據れば、骨咄祿は唐と十七度、契丹と七度、九姓と五度戰つてゐる(T2S)。骨咄祿が獨立の旗幟を揭げて Čuγai-quzi と Qara-qum に據つてゐた際に、九姓の民に可汗が立ち、Quni Säγün, Toγra Säunig を唐と契丹に送つて突厥を挾擊しようとの情報があつた。暾欲谷は骨咄祿を助けて九姓を破り、骨咄祿と九姓の民をば Üüükän の地に導き、自らもこゝに居を定めたと云ふ(T1S)。從

つて骨咄祿の九姓に對する關係は、單なる抄掠に止まらず、屢々九姓を破り、Ütükän の地も突厥の民の據る所となつたのである。骨咄祿が死せる時九姓の Baz Oayan を先頭の balbal として建てたと云ふのも(IE16)、九姓擊破の明證と考へられる。

天授二年(31)(六九一)骨咄祿の後を繼げる默啜 Qapayan Qayan と九姓との關係を傳へる史料も僅少にして詳細に知るを得難いのであるが、新唐書回鶻傳に

武后時突厥默啜彊盛取鐵勒故地、故回紇與契苾、思結・渾三部度磧徙甘涼間。

と見え、默啜彊盛のために回紇は契苾・思結・渾三部と共に磧を度り甘涼の間に徙つてゐる。唐會要九八廻紇の項に據れば「比來粟死子毒解支立、其都督親屬及部落征戰有功者、並自磧北徙居甘州界」とあり、廻紇の主要部はこの時甘州の界に徙つたのである。また開元年間河西節度使王君㚟との不和に依つて、瀚海大都督廻紇承宗・渾大得・賀蘭都督契苾承明・盧山都督思結歸國はそれ〴〵瀼州・吉州・藤州・瓊州に長流され、右散騎常侍李含門・特進契苾嵩は廻紇等と結婚するを以てそれ〴〵撫州別駕・連州別駕に貶せられたことがある(舊唐書一〇三王君㚟傳)。瀚海・盧山は貞觀二十一年鐵勒諸部に六府七州を設けた時廻紇・思結に置かれた府名であつて、思結もその都督一族は甘涼に徙つたと解され、賀蘭州は貞觀六年內附せる契苾に置かれた州名なるべく、則天武后の時徙つた契苾は之に合流したことゝ思ふ。蓋し骨咄祿が九姓を破り、Ütükän の地に突厥の民を徙したと云つても、九姓は突厥に對して服屬の狀態にまでは立ち至らざりしなるべく、默啜强盛となり、恐らく廻紇の據地セレンガの流域にまでその經略が延びるに及んで、廻紇の主要部は契苾・思結・渾三部と共に甘涼の間に徙つたと推定されるのである。默啜の在位期は西は突騎施の娑葛を滅し、東は契丹・奚を役屬して、「其地東西萬餘里控弦四十萬、自

頡利之後最爲强盛」(舊唐書突厥傳)と云ふが如き强盛を誇る時期であつたが、九姓には默啜に服屬することを肯んぜず、甘涼の間に徙る諸部があつたことを注意すべきである。默啜は晩年に於て自ら兵威を恃んでその衆を虐用し、既に老いて部落漸く逃散怨叛する者が多い狀態となつた(兩唐書突厥傳)。闕特勒碑文(IN 1)に

toquz oγuz budun käntü budunym ärti. täγri jir bulγaqyn üčün jaγy boldy. bir jylqa bis joly süγüšdimiz.

九姓ノ民ソノモノハ我ガ民デアツタ。天地ノ混亂ノ故ニ敵トナツタ。一年ニ五度戰ツタ。

とあるのは、かゝる狀態の下に、漠北に於ける九姓が離叛したと解される。新唐書突厥傳に「默啜討九姓戰磧北、九姓潰人畜皆死、思結等部來降、帝官之」とあり、通典北狄傳突厥の項には

「開元」三年(七一五)秋默啜與九姓首領阿布思等戰于磧北、九姓大潰人畜多死、阿布思率衆來降。

と見え、また冊府元龜九七四外臣部褒異篇に據れば、開元三年十月己未、北蕃投降の九姓思結都督磨散・大首領斛薛移利殊功・契都督邪沒施・匐利羽都督莫賀突然・首領延陀薛渾達都督・奴賴大首領前白登州刺史奴賴孝・跌跌首領刺史裴艾に授官賜與して蕃に放還したとある。九姓首領阿布思が九姓思結都督磨散に當るべきことは、既に羽田博士に依つて指摘されてをり、[32] 思結が主力となり、斛薛・契・匐利羽・延陀・奴賴・跌跌の諸部は之に附隨して戰ひ、唐に投降したのであらうと思ふ。闕特勤三十一歲の時 Izgil の民を擊滅したと云ふのが(IN 3—1)之に當る事項である。開元四年默啜は北の方九姓拔曳固を討つて獨樂河に戰ひ大いに之を擊破したけれども、拔曳固の逆卒頡質略に殺され、首を京師に送られることゝなつた。廻紇・同羅・霫・拔曳固・僕固の五部落が來附

して大武軍の北に安置されたのは、この戰に關聯してをり、舊唐書八玄宗紀、資治通鑑共に默啜の戰歿と五部落の來附を開元四年六月癸酉の條に掛けてゐる。來附した五部落の部酋とは拔曳固都督頡質略・同羅都督毗伽末啜・霫都督比言・回紇都督夷健頡利發・僕固都督曳勒歌の謂であらうと思ふ（資治通鑑開元六年二月戊子）。闕特勤碑文に據れば、闕特勤三十一歳の時 Izgil の民を擊滅した記事に續けて、九姓と一ケ年に五度戰つた。最初は都護城㉝ Toγo-balik で戰ひ、二度目は阿跌 Ädiz と Qusläγaq で戰つて擊滅し、三度目は Bo［……］で九姓の民を破り、四度目は Čuš baši で戰ひ、同娥特勒 Toγa Tegin の葬式に際して同羅 Toγra の一部落 Alγaγu と十人の者を殺し、五度目は九姓と Äzgänti-qadaz で戰ひ、莫賀庫寒山㉞ Maγa-quγan で冬じもりし、春敵意ある九姓に兵舍を襲はれて危く難を免れた。若し闕特勤なかりせば萬事窮したであらうと云ふ意味を述べてゐる（IN 4—10）。毗伽可汗碑文に據れば、九姓と一ケ年に四度戰つた。最初は都護城 Toγobalik で戰ひ、二度目は Andaγu(?) で戰ひ、三度目は［Čuš-bačï］で戰ひ、同娥特勒 Toγa Tegin の葬式に際して同羅 Toγra の一部落 Yilpaγu を不意に襲うて拋り、四度目に Äzgändi Qadaz で戰つたことを述べ、次に莫賀庫寒山 Maγa-quγan で冬じもりし、春敵意ある九姓に襲はれて危く勝つた。九姓の民は九姓韃靼 Toquz Tatar と聯合して來り、Aγu で二大戰を戰つて勝ち、天惠に依つて三十三歳の時に汗位に卽いた。九姓の民はその土地を捨てゝ唐に赴いた。汗位に卽いて、突厥の民を整へ、九姓の據地を破壞した。廻紇 Uiγur の Iltäbär は百人許りと東方に逃れたと云ふ意味を述べてゐる。この闕特勤・毗伽可汗兩碑文の記事には考證すべき點が、なほあると思ふけれども、要するに闕特勤三十一・二歳、毗伽可汗三十二・三歳の事件にして開元三・四年に當るべく、廻紇・同羅・霫・拔曳固・僕固の五部落が來附したのもこの間の出來事に違ひない。Uiγrur Iltäbär とは新唐書回鶻傳に「明年攻殺默啜、

於是別部移健頡利發與同羅、霫等皆來、詔置其部於大武軍北」とある移健頡利發に比定出來るかも知れない。なほこゝに默啜の戰歿を記してないのは、恐らく諱みて避けしなるべく、別の箇所（II E 25）では民の無知怯懶にその死因を歸してゐる。

開元四年（七一六）默啜の後を繼げる毗伽可汗 Bilgä Qaγan は闕特勤碑文（IE25—26）（〔 〕は毗伽可汗碑文に依り補ふ）

täγri, il birigimä täγri, türk budun ati küsi jok bolmazun 〔tijin, äzim ol täγri〕 qaγan
天　國ヲ興ヘタ　天ハ　突厥ノ　民ノ　名ト譽レガ　ヒビテハナラヌト　云ツテ　余自ラヲ　カノ　天ハ　可汗トシ

olurtdi äriné. näd jilsiγ budunqa olurtmadym, iečä ašyz, tašra tonsyz jabyz jablaq budunqa
テ卽カシメタ。　財　蓄アル　民ニ　卽イタノデハナイ。内ニハ食ナク　外ニハ　衣ナク　甚ダ　惡シキ　民ノ

özä olurtym.
上ニ卽イタノデアル。

と見え、恐らく九姓との戰で疲弊した民の上に可汗となつたのであるが、闕特勤と回復の策を講じて、憔悴した民に生氣あらしめ、民に衣食を給し、九姓・契丹・奚及び唐に十二回出征して四界を安寧にし敵なからしめたと云ふ意味を次に記してゐる。舊唐書突厥傳に據れば、開元九年（七二一）暾欲谷は拔悉密を北廷に破り、兵を廻らして涼州の羊馬を掠め、官軍大敗「小殺（毗伽可汗）由是大振、盡有默啜之衆」と見え、略々默啜の盛時に還つたのである。舊唐書九三王晙傳に、

突厥默啜爲九姓所殺、其下酋長多欵塞投降、置之河曲之地、俄而小殺繼立、降者漸叛。

と見え、唐に投降した酋長にも毗伽可汗の立つて後漸く叛く者が現はれてゐる。毗伽可汗の强盛と共に九姓は漸く名實備はる服屬の狀態になつたと思ふ。暾欲谷碑文（T2 N63）に

o[l] türk bilgä qaγan türk sir budunγ oγuz budunγ ägidü olurur.

カノ 突厥 毗伽 可汗ハ 突厥ノ統一シタ(?)民ヲ 九姓ノ 民ヲ ヨク 所ヲ得シメテキル。

とあり、毗伽可汗が突厥及び九姓の民をよく支配したことを記してゐる。また闕特勤碑文（IE 22）に

türk oγuz bäglärі budun asidiγ! özä täγri basmasar, asra jir tälinmäsär, türk budun, iliγjin

突厥 九姓ノ 官 民ヲ 聽ケ 上 天ガ 壓チナイ限リ 下 地ガ 裂ケナイ限リ 突厥ノ 民ヲ 汝ノ國ヲ

törüγjin käm artaty?

汝ノ法ヲ 誰ガ 壞テルカ。

と云ふ türk oγuz bäglärі budun asidiγ! と呼びかける一句は、明白に九姓の服屬を示してゐるのである。思ふに則天武后の時廻紇の主要部は契苾・思結・渾三部と共に默啜の强盛を避けて甘涼の間を徙り、默啜の晩年離叛して默啜を戰歿せしめた思結及び廻紇・同羅・霫・拔曳固・僕固の諸酋長は既に唐に内附してゐる。九姓の殆ど各部族に亙つて漢土に移轉する部衆があつたことは、漠北に殘留せる九姓をして總じて著しく弱體化せしめたに違ひない。毗伽可汗以後伊然・登利・烏蘇米施三可汗を通じて、漠北に殘留せる九姓にして史上に現はれるもの僅かに同羅部の阿布思に止ることは、また以て九姓の弱體化を窺はしめるに足ると思ふ。毗伽可汗はこの九姓の民をば突厥の統一した（?）民と共によく支配したのである。然るに突厥は毗伽可汗の死後伊然・登利・烏蘇米施三可汗が相繼ぎ、漸く内部に紛亂を生じて、天寶三載(七四四)拔悉密及び回鶻・葛邏祿のために滅亡するに至り、次いで回鶻の隆盛期が出現するのである。回鶻の隆盛と共に九姓は如何なる狀態に置かれたのであるか。

六

元來回鶻の主要部は則天武后の時默啜の强盛を避けて契苾・思結・渾三部と共に磧を度り甘涼の間に徙つてゐる。瀚海大都督廻紇承宗・渾大得・賀蘭都督契苾承明・盧山都督思結歸國の如き甘涼に徙つた九姓諸部長が、河西節度使王君㚟との不和に依り、それ〴〵瀙州・吉州・藤州・瓊州に長流されたことは既に述べた所であるが、廻紇承宗の族子瀚海府司馬護輸は開元十五年(七二四)衆怨に乘じて王君㚟を殺し、その尸を載せて吐蕃に奔らんとしたと云はれ(資治通鑑開元十五年閏月庚子條、舊唐書一〇三王君㚟傳)、或は王君㚟を殺して安西諸國朝貢の道を梗絶し、之を久しくして突厥に奔り、または退き烏德健山を保したと記さる(兩唐書回鶻傳)。甘涼の間に於ける九姓の消息に就いては、契苾が涼州闕氏岑移向特勒山に住すると云ふ以外(唐會要七二諸蕃馬印條)、以後徵すべき記錄に乏しいけれども、護輸に從ひ恐らく烏德健山に退いた部衆も多からうかと思ふ。骨力裴羅は卽ち護輸の子に當り、磨延啜と共に突厥の混亂に乘じて漠北に殘留せる九姓を統合したのである。回鶻葛勒可汗(磨延啜)碑文(N.5)に

toquz oγuz buduniminiŋ tirü qobrati altim.

九姓ノ 我ガ民ヲ 集メ 聚メテ余ハ 奪ツタ。

と見え、碑文の記載順より判ずれば、突厥の烏蘇米施特勒 Ozmiš Tegin が可汗となる以前に、骨力裴羅の子磨延啜は既に九姓を統合してゐる。突厥の內部には登利可汗の死後宗族間に軋轢があつて紛亂した。卽ち開元二十九年(七四一)秋七月左殺判闕特勒登利可汗を殺して毗伽可汗の子を立て、俄かにして骨咄祿葉護のために殺され更にその弟を立てゝまた殺され、骨咄祿自立して可汗となる。玄宗はこの內亂に乘じて左羽林將軍孫老奴に命じ回紇・葛邏祿・拔悉密等部落を招諭せしめ(資治通鑑開元二十九年七月)、天寶元年(七四二)八月丁丑拔悉密等は骨咄祿葉護を攻殺し、拔悉密の酋長阿史那施を推して頡跌伊施可汗となし、回紇・葛邏祿は自ら左右葉護と稱するに至つた。

突厥の餘衆は共に判闕特勒の子を立てゝ烏蘇米施可汗となし、その子葛臘哆を以て西殺となしたが、八月丁亥突厥西葉護阿布思・西殺葛臘哆・默啜の孫勃德支・伊然の小妻・毗伽・登利の女等部衆千餘帳を率ゐて相次いで唐に來降し「突厥遂微」とある(資治通鑑)。かゝる突厥の混亂狀態に乘じて磨延啜は九姓の民を統合したに違ひない。當時九姓は同羅部の阿布思に依つて統轄されてゐたらしい。突厥の宗族と共に唐に來降した突厥西葉護阿布思は「天寶初其酋帥阿布思以萬餘帳來降」(通典一九九北狄傳同羅)と云ふ阿布思に比定さるべく、同羅部の阿布思が突厥の西葉護として恐らく九姓の統轄に當つてゐたと推定されるのである。「九姓の我が民を聚め集めて余は奪つた」とは、阿布思の統轄下から九姓の民を奪取したと云ふ意味に解され、回紇が葛邏祿・拔悉密と並び玄宗の招諭を受ける程に有力な部族となつてゐるのも、九姓を奪取した結果であらうと思ふ。天寶三載八月拔悉密は攻めて烏蘇米施可汗を斬り、國人その弟鶻隴匐白眉特勒を立てゝ白眉可汗となしたが、會々回紇・葛邏祿は共に拔悉密の頡跌伊施可汗を攻殺し、回紇骨力裴羅が、自立して骨咄祿毗伽闕可汗と稱するに至つた。新唐書回鶻傳に據れば、骨力裴羅は自ら骨咄祿毗伽闕可汗と稱し、南して突厥の故地に居り、牙を烏德鞬山 Ütükän 昆河 Orkhon の間に徙し、「盡有九姓地」とある。九姓の民を統べ、盡く九姓の地を有することに依つて、新遊牧國家の基礎を固め、翌天寶四載突厥の白眉可汗を殺して、「斥地愈廣、東際室韋、西抵金山、南跨大漠、盡有突厥故地」(資治通鑑)と記さるゝ如く、盡く突厥の故地を領有したのである。

回鶻は九姓を統一することに依つて新遊牧國家の基礎を固め、盡く突厥の故地を領有した。記錄に徵せられる限りでは、唐初以來九姓の一構成部族として活動してゐた回鶻は、こゝに至つて九姓を統轄する地位に立つたのである。それと共に回鶻に云ふ稱呼は部族的名稱の域を脫して、國家的總轄的名稱の性質を帶びて來たと解して

差支へない。九姓鐵勒・鐵勒九姓と云ふ稱呼は突厥の復興期に至り漸く用ひられること稀にして、單に九姓と呼ばれるのが常であつたが、回鶻の建國以後九姓回鶻が之に代るべき名稱となり、九姓・九姓鐵勒・鐵勒九姓またはその略稱となつてゐる鐵勒の文字は、殆ど史上から沒し去るに至つた。のみならず九姓を構成した諸部族も突厥毗伽可汗の在位期に總じて弱體化してゐたに相違ないこと既述の如くであつて、回鶻の建國以後に於ても部族自體として最早活動した痕跡はない。僅かに回鶻の部將として僕固全・僕固俊[35]があり、愛騰里邏羽錄沒密施合胡錄毗伽懷信可汗がもと跌跌氏（跌跌は阿跌の謂なり）であつたことを傳へるに止まる（新唐書回鶻傳）。たゞ唐に內附して河曲にゐた部衆には、阿史那從禮が說いて九姓府六胡州の諸胡數萬衆を誘ひ（資治通鑑至德元載九月傳）、新唐書二一八沙陀傳に「太和中（八二七—八三五）柳公綽領河東奏陘北沙陀素爲九姓六州所畏」と見え、なほ九姓の故稱を以て呼ばれるものがあり、契苾部は唐末に至るまで河曲の東北邊に餘喘を保ち、[26]また唐に來降した九姓諸部長及びその子孫にして安史の亂に目覺しく活躍する者があるけれども、鐵勒並びに九姓・九姓鐵勒・鐵勒九姓の如き稱呼が回鶻の建國以後漸く漢史から消滅すると云ふ漠北の趨勢に變りないのである。

【註】

① 羽田博士「九姓回鶻と Toquz Oyuz との關係を論ず」東洋學報九ノ一、五八頁註釋①。

② Pelliot, L'Origin de T'ou-Kiue. Toung Pao. 1915° なほ Marquart 氏は突厥を eine türkische Pluralform *Türküt と解してゐるが（W. Bang und J. Marquart, Osttürkische Dialektstudien. s. 71. n. 4.）古代トルコ語にかゝる複數形はない。

③ Barthold, Die historische Bedeutung der altürkischen Inschriften. s. 8.

④ Ensyclopaedia of Islam, Türk の條。

⑤ Ensyclopaedia of Islam, Ghuzz の條。

⑥ Marquart, Chronologie der alttürkischen Inschriften. s. 26.

⑦ Ibid: s. 23—24. 同樣のことは Osttürkische Dialektstudien, s. 35—36. にも述べられてゐる。

⑧ Barthold, Die altürkischen Inschriften und die arabischen Quellen. s. 27—23. なほ Sir-Darya の Ghuz 國に就いては Chaliph al-Mahdi 158—169=A. D. 775—785 の時代に Tughuzghuz から移轉してその早期に於てすら Islam を信仰したと云ふ Ibn al-Athir の記事を指的しておくに止める (Ensyclopaedia of Islam, Türk の條)。

⑨ Barthold, Die historische Bedeutung der alttürkischen Inschriften. s. 8.

⑩ Radloff, Die alttürkischen Inschriften der Mongolei. Neue Folge, s. 149.

⑪ Schäder, Altürkische Inschriften aus der Mongolei in Übersetzung und mit Einleitung von Vilhelm Thomsen.

⑫ Thomsen, Inscriptions de l'Orkhon. p 146, n. 21

⑬ Hirth' Nachworte zur Inschrift des To'jukuk, Das Volk der Tardus の項。

⑭ Marquart, Chronologie, s. 13.

⑮ Radloff, Die altürkischen Inschriften der Mongolei. Zweite Folge, s 116.

⑯ 之は Thomsen 氏の讀み方に從ふ (Turcica. p. 90)。

⑰ A. von Le Coq, Ein manichäisches Buch-Fragment aus Choitscho. Festschrift Vilhelm Thomsen. 所收 p. s. 152.

⑱ 羽田博士「九姓回鶻と Toquz Oγuz との關係を論ず」五八頁註釋①を見よ。なほ袁紇が Oγuz の對音に當ることは、同博士昭和四年度特殊講義にて述べられたことを借用したノートに依り知る。

⑲ Ramstedt, Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei. 所收の葛勒可汗碑文 (0.1—3)。Radloff, Die alttürkischen Inschriften der Mongolei. s. 308.

⑳ Olaf Hansen, Zur Soghdischen Inschrift auf dem dreisprachigen Denkmal von Karabalgasun. Journal de la Sociée Finno-Ougrienne. 44. s. 15.

㉑ 南朝側の記錄では高車を丁零または丁零胡と記してゐる。南齊書五九芮芮虜傳、梁書五四芮芮傳を見よ。

㉒ 志田不動磨氏「敕勒の內徙に就いて」蒙古學第一册十六頁。

㉓ 魏書高車傳は北史高車傳を踏襲したと云はれ、太平御賢八〇高車の條には、北史曰として全く之と同じ文句を載せ、勅勒を勅勒となすのみ。現行の北史は誤つて「北方以爲高車・丁零」としてをり便宜上魏書を引用した。

㉔ 魏書七高祖紀上、延興三年十有二月壬子の條及び同書一八元深傳を見よ。

㉕ 松田壽男氏「高車獨立年代攷」回教圈一ノ一。

㉖ 同氏「西突厥王庭考」四、註七〇、史學雜誌四〇の四。

㉗ 新唐書回鶻傳下に「莫賀咄死、子何力尙紐、率其部來降、時貞觀六年也、詔處之甘涼間以其地爲楡溪州」と見え、皇興西域圖志三疆域五裕勒都斯の條には、裕勒都斯を契苾の故地と見、こゝに楡溪州が置かれたと解してゐる。然し貞觀二十一年漠北の鐵勒諸部に六府七州を設けた時、契苾に楡溪州を置いたこと舊唐書鐵勒傳・舊唐書廻紇傳・新唐書回鶻傳上の明記する所であつて、楡溪州は唐會要七二諸蕃馬印の條所說の如く、獨樂水已南にあつたに違ひない。契苾何力の故地に楡溪州を置いたとする新唐書回鶻傳下の記事及び之に依つて立てられた皇興西域圖志の解釋は誤りと見るべきである。契苾は開皇末の混亂に際して薛延陀と共にズンガリアに移轉したと推定されるが、なほトラ河々域に殘留せる部衆のあつたことは武德二年頡利可汗が立つと共に次弟を以て延陀設となして延陀部を掌らしめ(新唐書突厥傳)、また貞觀二十一年鐵勒諸姓と共に契苾車必俟斤が內屬してゐることに依つて窺ひ得ると思ふ。楡溪州は卽ちこの契苾車必俟斤に對して置かれたと推定されるのである。貞觀十六年冬十月、契苾何力の弟沙門は賀蘭州都督に任じて涼州に居り(資治通鑑)、賀蘭州が甘涼に安置された契苾に設けた州名ではないかと思ふ。

㉘ 通典に「貞觀元年陰山以北薛延陀・廻紇・拔野古等十餘部皆相率背叛」とあり、張公謹が突厥可取之狀を奏した第二條に「又其別部同羅・僕骨・廻紇・延陀之類並自立君長將圖反噬」に見える。

㉙ 羽田博士「漠北の地と康國人」支那學三の五。

㉚ 羽田博士「九姓回鶻と Toquz Oyuz の關係を論ず」二〇頁註釋⑥。

㉛ 岩佐精一郎氏「突厥毗伽可汗碑文の紀年」東洋學報二〇の四、九九頁。

㉜ 羽田博士「九姓回鶻と Toquz Oyuz との關係を論ず」三八頁。

㉝㉞ 岩佐精一郎氏「突厥毗伽可汗碑文の紀年」東洋學報二三の四、一〇九頁。

㉟ 册府元龜九九五外臣部交侵篇に「太和五年豐州刺史李公政奏、黨項於墨山刦掠歸國廻紇、差兵馬使僕固全等七人爲賊射殺」と見え、新唐書回鶻傳に「大酋僕固俊自北廷擊吐蕃斬論尙熱盡取西州・輪臺等城」とある。

㊱ 册府元龜九七七外臣部降附篇に據れば、元和六年正月振武節度使李泳は黑山外契苾部落四百七十三帳を收得したことを奏してをり、また新唐書回鶻傳下契苾の條に「太和中其種帳附於振武云」と見える。なほ舊唐書一六一劉沔傳、石雄傳、同書一六二盧簡求傳、資治通鑑中和元年五月甲子の條を參照せよ。